

ようこそアヤカシ相談所へ

松田詩依 Shiyori Matsuda



アルファポリス文庫

目次 Contents

序 …………… 005

第一話 入社試験と迷子
014

第二話 肝試しのマナー
063

第三話 聖夜の約束
115

第四話 終わらない冬、遠い春
163

第五話 笑顔のこたえ
245

序

『末筆ではございますが、山上様やまがみの今後の益々ますますのご活躍をお祈り申し上げます』

白々しい言葉が端的に並べられた、何通目かの不採用通知を山上静乃しずのは握り潰した。就職活動を始めて早半年。卒業論文も終え、卒業までのカウントダウンが着々と進んでいく中で、静乃の内定は全く決まりそうになかった。

「お祈りする余裕あるなら採用してよ！ 就職決まなんのに活躍なんかできるかっての、ちくしょー！」

たった一枚の履歴書、たった数分の面接で一体何が分かるというのだ。いつか自分を落としたことを後悔するほど活躍してやろうじゃないかと、開き直ったように不採用通知を破り、紙吹雪かみふがきのごとく空高く放り投げた。

「就職決まったあ！」

「社畜しゃちくになる前に、今のうちに遊ばなきゃだな」

現実逃避していたところに聞こえてきた同級生達の会話で、一気に現実に叩き落とされた。

宙に舞っていた紙吹雪も地面に落ちればただの紙屑。清掃員からの鋭い視線を感じ、ここが大学の中庭だったことを思い出して、慌てて紙屑を拾い集めた。

「会社、落ちちゃったんだ」

ふと顔を上げると、静乃が座っていたベンチに、彼女と同じリクルートスーツに身を包んだ女子学生が落ち込んだ様子で座っていた。

「……もしかして、あなたも？」

下から顔を覗き込むように恐る恐る尋ねると、彼女は疲れ果てた酷い顔色でゆつくりと頷いた。

「お、おーい……大丈夫？」

俯く彼女は息が詰まってしまいそうな程、どんより重い雰囲気を負っている。

静乃が心配そうに覗き込みながら、目の前で手をひらりと振ると、彼女はゆつくりと顔を上げた。

「今破り捨ててたのって……」

「そう、御察しの通り不採用通知。おまけに記念すべき十通目。なんかもう落ち込む以前に笑えてきちゃってさ、思わず破り捨てちゃったんだけど……意外とすっきりし

た」

もし次の機会があったら試してみるといい、とおどけてみせると、彼女は困惑気味に引き攣った笑みを返した。

「十社くらいならまだ良いよ。私なんて、もう数えきれないほど……」

「ストップ。こんな互いの精神すり減らすような比べっこ、悲しくなってくるからやめよう」

受けてきた企業名を指折り数えながら羅列する女子学生の肩を、静乃は慰めるように叩いた。

話途中で言葉を遮られてしまった彼女は申し訳なさそうに肩を縮こまらせ、黙り込んでしまう。

自分が話を途切れさせたのだからなんとかしなければと、静乃は次の話題を探した。

「え、えっと……どういう所目指してたの？」

「……両親は大企業とか公務員とか、安定した仕事に就いて欲しかったみたいなんだ。大学まで入れてもらったから少しくらい恩返ししなくちゃと思って、頑張ってた色んなところ受けてただんだけど……全滅だったの」

「あ、あら……それは、その……」

「ううん、いいの分かっている。本気でその仕事をしたいと思っていないのに、受かる

わけなんてないんだから」

嘲笑を浮かべて俯いた彼女の顔に影が落ちた。

「諦めたような声音が根元から折れていそうなほど暗く、竦めた肩は重りを乗せたように下がっていく。その一方で、何かに耐えるように膝の上で硬く握られている拳は、本心を押し殺すかのように震えていた。

「本当はやりたいことが、あったの？」

静乃の問いかけに彼女ははっと顔を上げ、困ったように視線を彷徨させた。

「……笑わない？」

不安げに呟かれた言葉に、静乃は震えている彼女の手の上に自身の手を置いてゆっくりと頷いた。

「……絵本作家になりたかったの」

蚊の鳴くような声で戸惑いがちに呟かれた言葉を、静乃は聞き漏らさなかった。

「絵本作家？」

「……うん。昔から絵を描くのが好きで」

彼女は小さく頷きながら、ポケットから手の平サイズほどの使い込まれたスケッチブックを取り出した。

受け取ってページをめくると、デフォルメされた動物やキャラクターなど色鉛筆で

描かれた可愛らしいイラストが、びつしりと描かれていた。

「わ、上手！ すごい可愛い」

「ありがと……親にはそんな夢なんか見てないで、現実を見ろって怒られたんだけどね」

夢中でページをめくり絵を見ている静乃を見て、女子学生は照れながらもとても嬉しそうに目を細めた。

「なんか不思議。今まで誰にも話したことなかったのに……貴女には自然と話せちゃった」

「私、絵とかすごい下手だからさ。こんな風に描けると楽しいんだろなあ。やりたいうことがあって素敵だね」

「貴女はやりたいことないの？」

女子学生からの問いかけに、今度は静乃が唸った。考え込むようにゆっくりと空を仰いだ。

「ない、わけじゃないんだけど……はつきりと分らないんだよね。大学にいるうちにみつかると思ってたんだけどやっぱりダメで。社会に出たら今度こそ——なんて思ってたけど、やりたいことも分からず足元ふわふわしてる人間なんてどこも拾ってくれるはずなくて」

これまで受けてきた悲惨^{ひげん}すぎて笑い話になるような面接を思い出し、開き直るように笑いながら静乃はスケッチブックをばたんと閉じて彼女に差し出した。

「やりたいことがあるってとつても素敵^{すてき}だと思うよ。そりゃ現実を見たらさ、売れる人なんてほんの一握りで辛い^{つら}ことばかりだし。子供にそんな先の見えない苦勞^{くろう}させたくないってご両親の気持ちもよく分かるよ。でもさ、絵本って読んだ人に夢を与えるものでしょう？ 描^かいてる人が夢見なくてどうするのさ！ いつか素敵な絵本読ませてね」

力強い静乃の言葉を彼女は目を丸くして、固まったまま受け止めた。

その硬直していた表情が、徐々に崩れていく。まるで笑うという行為をゆつくりと思い出していくかのように笑みが零^{こぼ}れ、終^{しま}いには腹を抱えて笑い出した。変なことをいつてしまっただろうかと、静乃は呆然^{ぼうぜん}とした。

「……っ、ふふっ。あははっ！ そうだよね、夢を諦^{あきら}めたのは私の方だった。夢を見なきゃ描けないか……うん、うん……ああ、もっと早く気づけばよかったなあ……」
笑いすぎて目尻に浮かぶ涙を拭いながら、愛おしそうにスケッチブックを胸に抱いて、彼女は暫^{しば}く笑っていた。

「ああ、くるし……はあ……一生分笑った気がする」

女子学生は乱れた呼吸を整えるために深呼吸を何度か繰り返すと、握られていた静

乃の手を握り返し、立ち上がった。

「もうそろそろいかなくちや。お話しできて嬉しかった。静乃ちゃんもやりたいこと、見つかるといいね」

札を述べた彼女は晴れ晴れとした眩しい笑みを浮かべ、軽く手を振ると振り返ることなく立ち去っていった。

「あ、ちょっと待って。なんで私の名前——」

名乗っていないはずの自分の名前を何故知っているのだろうか。慌てて追いかけてようとしたが、不思議なことに女子学生の姿は既に見えなくなっていた。足を止め、ベンチにすくと腰を下ろした。

「君が山上静乃さん？」

次の瞬間頭上高くから降りた影と、男性のものと思われる爽やかな声に静乃はゆつくりと顔を上げた。

目の前には面接時のお手本にしたいくらいの爽やかな笑みを浮かべた、容姿端麗^{さか}で髪^{かみ}の真つ白な青年が立っていた。彼は笑みを崩すことなく、座っている静乃の頭の上から足の先までじっと見回した。

あまりにも美青年が見つめてくるものだから、これまで縁がなかった春の予感ではないのかと、静乃の乙女心が期待に一瞬高鳴ってしまった。

「あんな人畜無害のもいちいち相手にしてるなんてさ……驚きと呆れを通り越して、尊敬するよ」

「は」

笑顔のままいきなり投げつけられた毒舌に静乃の眉間に皺が寄り、開いた口から聞拔けな音が零れた。一瞬でも目の前の青年に見惚れ、興味があつて声をかけてくれたのかと浮き足立った自分を恥じた。

「あの……なんの用でしようか」

不審を隠さず睨みつけるが、青年は笑顔のまま表情を変えことなく静乃を見下ろしている。

「はじめまして。僕は倉下凜太郎といいます。君にびつたりな仕事があるんだけど、よかったら働いてみませんか？」

静乃は鈍い動きで顔を下ろして彼が差し出した用紙を見た。そこには「相談所職員募集中」との文字が書かれているような気がした。あまりにも突然のことで、用紙に記載してある内容が頭に入ってこなかったのだ。

静乃が条件反射で頷いてしまうと、彼はさらに笑みを深くして、静乃の手を用紙ごと力強く握りしめた。

「大丈夫、君みたいなお人好しにはびつたりな仕事だから！ それじゃあ、早速面接

の日時決めちゃおうか」

「え、いや、あの……ちょっと！」

褒められているのか貶されているのか、頭の理解が追いつかないまま話は坂を転がり落ちるように勝手に進んでしまった。運とは良いも悪いも、僅かに傾いた方へ転がっていくものらしい。

事実、この倉下凜太郎という男との出会いがきっかけで、山上静乃の就職活動は思っても寄らない方向へ進むことになるのであった。

第一話 入社試験と迷子

「今日学校終わったら、まっすぐ友達の家遊びにいくな」

ぼくは、初めて嘘をついた。友達と遊ぶ約束なんてなかった。お母さんにどうしても内緒にしないとイケないことがあったから。

その日は息が白くなるくらい寒かった。学校が終わると、まっすぐ近所の大きなショッピングモールに走った。

初めて一人でこんなに大きな場所に来た。いつもお父さんとお母さんと買い物に来るけど、まるで違う場所みただった。緊張して手が少し震えて、いろんな場所をきよろきよろと見てしまう。

でも、大丈夫。この日のためにお父さんと何回も何回も練習したんだ。だから、大丈夫。握りすぎて皺くちやになっちゃったプレゼントの引換券を握りしめ、お店に向かった。「あ、あのっ。お母さんのプレゼントをよやくしてた、うえはらですっ」

高いレジで背伸びをして、店員のお姉さんに引換券を渡した。

「一人で偉いね。はい、こちらがプレゼントになります。お母さん喜んでくれるといいね」

お姉さんはいっこりと笑って、お母さんの大好きなオレンジ色のリボンが巻かれたプレゼントを手渡してくれた。あまり大きくないけれど、ずしりと重さを感じた。このプレゼントを買うために、お父さんのお手伝いを沢山して、お給料をもらったんだ。外に出ると冷たい風がびゅうと吹いて、雨がざーざー降っていた。今日の天気予報は雨じゃなかったのに。

傘なんて持っていないし、長靴だって履いてない。プレゼントが濡れないようにランドセルの奥にしまつて、急いで走った。濡れたくないのもあったけど、早く帰ってお母さんを驚かせたかったから。

五分くらい走って家に着いた。雨でびしょ濡れになっちゃったけれど、走って来たから寒くはなかった。

息を整える前に、思い切り玄関の扉を引いた。けれど開かなかった。ぼくがこんなに早く帰ってくることを知らなかったから、お母さんはどこかに出かけちゃったんだろう。

家の鍵を持っていない。だってぼくが帰るときにはいつもお母さんが家にいたから。玄関先の階段に座り込んでみると、冷たい風と雨に濡れたせいで急に寒くなってきた。

た。

こんな天気だから、目の前にある公園では誰も遊んでいない。いつも散歩をしてる近所のお母さんと可愛い赤ちゃんもいない。

このままお母さんが帰ってこなかったらどうしようと思いに寂しくなって、ランドセルをぎゅうつと抱きしめた。

きつとお母さんに嘘をついたバチが当たったんだ。

待っても待っても、お母さんは帰ってこなかった。雨も風もだんだん強くなってきた。寒くて、心細くて、寂しくて、つい泣いてしまっそうになったんだ。

*

「山上静乃、二十一歳。三流大学心理学部、卒業見込み。職歴は特になし。オートマ限定、普通運転免許所持……」

男は手にした履歴書を淡々と読み上げながら、デスクを挟んだ向かい側に緊張した面持ちで佇むリクルートスーツ姿の静乃を、やる気のない瞳で見上げた。

恐らく一度も染めたことのないであろう真っ黒な髪を頭の後ろで一つ結びにし、化粧をしているのか分からない程の薄化粧。今時の女子大学生という割には酷く地味な

田舎臭い女、というのが、男が静乃に抱いた第一印象であった。

やたら目つきが悪い男と目が合うと、静乃はその視線から逃げるように萎縮し落ちて着きなく視線を彷徨わせた。

「あ、あの……相談所はこちらで……間違いない、です……よね」
「ああ、間違いない」

震えるか細い声すらも、力を振り絞らねば出すことができなかった。

静乃がここまで萎縮している理由は二つある。一つはこの相談所が入っている五階建てビルの内装だ。外観も酷く古びているように見えたが、ビルの中に一歩足を踏み入れて愕然とした。

扉を開けた瞬間に感じた冷気とむせ返るような埃の臭い。薄暗く不気味に伸びる廊下の壁はひび割れ、崩れ落ち、不良が描いたであろう無駄に上手いスプレーの落書きが幾つもある。床のタイルも所々剥がれコンクリートがむき出しの状態。

時折視線のようなものを感じて後ろを振り返っても、誰もいない。静乃の足音が響くビル内は人間の気配なんて微塵も感じられなかった。

最上階の最奥に着くまでに、何度逃げ帰ろうと思っただろう。無事に辿り着いた静乃は心底安堵したものだ。

そして、目の前に座っている男が二つ目の理由。

ボサボサの黒髪、やる気のない死んだような目の下には色濃い隈くまがくつきりと刻まれている。首元をきっちり隠したハイネックのシャツにパーカーとジーンズ姿という所長とは思えないだらしない出で立ちをしているのだ。

しかしこの廃墟はいきょ同然の場所こそ、静乃が就職面接を受けに来た相談所。目の前にいる目つきの悪い怪しげな二十代後半の男こそ、このオンボロ相談所の所長で間違いないのだ。

「話は大体倉下から聞いたけど。なんでこんなところに来たわけ」

「ええと、その倉下さんという方からこちらの求人票を渡されて——」

「俺は求人なんて出してないけど」

「え」

固まる静乃を見て呆れたように溜息をつきながら所長は面談中にもかかわらず堂々と煙草たばこに火をつけた。

新しい人間を雇わなくても従業員はいるし、人手に困ることもそうそう起こらない。誰かの人生を背負うなんて面倒極まりないし、そもそも就職面接なんて骨が折れることを自分からやるわけがないと、所長は饒舌じょうぜつに、淡々と、悪態をつきながら不機嫌そうに紫煙を吐き出した。

出会って数分で悪態を散々浴びせられ、静乃の心は既に折れかけていた。そんな彼女を従業員らしき少女が、背後にある来客用のソファの陰から顔を覗かせて心配そうに見ていた。

「え、っと。でも、あの……採用係の倉下さんという方に、是非入社してほしい、といわれてその場で面接の日取りを決めていただいた、のですけど……」

「俺も同じこといわれた。明日凄いの女の子が面接に来るからよろしくねー、って。まさか本当にこんな所にくる物好きがいるなんて思わなかったけど。そもそも採用係ってなんだよ。面倒ばっか押し付けやがって。凜太郎のヤツ、後で覚えてるよ」

腹立たししそうに舌打ちをして、まだ長い煙草を灰皿すすに擦り付け所長は再び静乃に視線を向けた。

「山上さん、だっけ。あんた、ここがどんな場所か分かってんの？」

「あ、はい。特殊な人達が集まる相談所……だと」

ふうん、と所長は鼻を鳴らした。静乃は倉下から詳細な説明を聞いてなかった。

彼から渡された書類には「相談所職員募集」の文字と相談所までの地図が記載されているのみで、詳しいことは相談所に行けば分かるの一点張りだった。

「……で、なんでこんな所にこようと思ったのさ」

頬杖をつきながら聞かれ静乃はびくりと肩を震わせた。散々面倒臭いと悪態をつきながらも、一応面接はしてくるようだ。既に諦めかけていた気を引き締めるように、

静乃は小さく深呼吸をし、こつりと踵を鳴らして背筋をびんと正した。
 「……しょ、正直に申しますと、これまで採用試験、十社近く落ちているんです」
 「それでヤケクソになって、受かりそうならどこでもよかったわけね」
 マニユアル通りの答えが返って来るかと思えば、素直に事情を暴露する就活生を見て、所長は驚いて目を丸くした。

履歴書を見る限り大した学歴もなければこれといった資格もない。そしてあまり相手の記憶に残らなさそうな素朴な見た目。

申し訳ないが、彼女を拾う企業がないのも分かるような気がした。

「こ、これまでお祈りメールとか、『君を必要としている会社は他にある』とか散々な結果でもう諦めかけていました。でもそんな時に倉下さんが声をかけてくださったんです。確かにこの相談所のことは何も分かりませんが、ぶっちゃけ自分が何をやりたいのかも分かっています。でも……でもっ、私は『君にびったりな仕事がある』っていつてくれた倉下さんの言葉を信じたいです！ 学歴も、資格も、特技もなく、平々凡々な私でも……役に立てることがあるなら、必要とされているのなら、それに応えたいです。どこでもよくて、ここにきたわけではありませんん！」

デスクに両手をついて、所長に頭突きをしかねない程、ずずいと静乃は顔を近づけた。時折声をひっくり返しながらも必死に張り上げ、机についた両手は震え、目は今

にも涙が零れそうなほど潤んでいる。その勢いに所長は思わず慄いた。

季節は間も無く十二月。これまで辛く長い就職活動を行ってきた。

周りの学生が次々と内定が決まっていく中で独り心細く、不安に耐えてきた。他人より秀でたものがないことを、他でもない静乃自身が痛感していたのだ。

だからこそ自分を必要としてくれた倉下の言葉は天にも昇るほど嬉しかった。そして静乃は全てをかけて、この廃墟の相談所にやってきたのだ。

先ほどまで萎縮して揺れていた静乃の瞳だが、最後には真っ直ぐに所長を見据えていた。

嘘偽りない本音を受け、所長の口角が僅かに上がった。彼は何十社も不採用になった哀れな女学生に微塵も同情などしていない。

普段やたら面倒事を押し付けてくるあの自分勝手な男がそれほど推した、この山上静乃という女がどんな人物なのか、僅かに興味が湧いた。

本当に彼女に素質があり、倉下のいう通り使えるのであれば、人間一人くらいならおいてもいいかもしれないと、本当に珍しく気まぐれを起こしてしまった。

「ハル」

「はあい」

「ガキんちよのこと、コイツと一緒に頼むわ」

「合点承知！」

呼び声一つで、ソファの陰からこちらの様子を窺っていた高校生くらいの少女が、待ってましたと足取り軽くやってきた。

黒髪を頭の高い位置でポニーテールにし、まるで原宿を歩いていそうなポップで個性的な服装の、静乃と同じくらいの背丈の少女。その中で一番目立つのは、首に巻かれた床を引きずる程長く太い縄だった。

少女が身につけるにはあまりに物々しいアクセサリーだと不思議に思ったが、きつと女子高生の間で流行しているファッションなのだと言得することにした。

相談所職員とは思えない程明るい少女の隣では、小学校低学年程の少年が不安げに静乃を見ていた。静乃は二人を見つめ立ち尽くした。

「入社試験」

「えっ」

「だから入社試験。ハルと一緒にそのガキンちよのこと助けてやって」

「は、はいっ！」

数秒の沈黙。彼がいったことを頭の中で囁み碎き、ようやく理解できたのか静乃は大きく返事をした。

「山上静乃です、宜しくお願いします！」

「ハルです。よろしくねー、シズちゃん」

深々と頭を下げる静乃に対し、人懐っこく手を振り挨拶をするハル。年下のようだが優しそうな子でよかったと静乃はほっと息をついた。

「あの……私はこれから何をすれば」

「アタシと一緒にサトルっちを助けてあげよう」

「は、はい！」

入社試験だというのに、付き添い付きで一緒に仕事をするなんて良いのだろうか。

そう一瞬考えたものの、逆にいえば、今後の静乃の行動はハルによって所長に筒抜けになる。人懐こそうなハルに気を緩めてしまいそうになったが、これは入社試験だと、気を引き締めるように自分の頬を叩いた。

「えっと、サトル君……だよ。私は山上静乃っていいです」

泣き腫らした様子から、静乃はサトルという少年は迷子なのだろうと察した。

「しずのお姉ちゃんも一緒に来てくれるの？」

「うん。お姉ちゃんも一緒に行くよ。少しの間だけでもよろしくね、サトル君」

その言葉にサトルは安心したようににはかんだ。ようやく笑顔を見られて、ほっとして静乃も微笑んだ。

「よしっ、じゃあ暗くなる前に行こうか。所長行ってくるねー」

「ん、氣いつけて。オオヤが戻ってきたら後で合流すんわ」

「はいはいーい」

「いってきますっ！」

なんとも緩い会話を交わして、ハルと静乃はサトルの手を引きながら事務所を出ていった。

扉が閉じ、ハルの明るい声と静乃の足音が遠ざかっていくと、所長はやれやれと溜息をつき椅子に深く凭もたれかかり、煙草に火をつけた。

「ったくさあ……お前らも懲こらりずに次から次へと面倒を持ち込んでくるよなあ」

立て付けの悪そうな鈍い音を立てて再び扉が開き、寂しげな表情をした者達がぞろぞろ相談所の中に入ってくる。

落ち着いて一服しようと思つたらすぐこれだ。所長は体を起こすと、火をつけたばかりの煙草を灰皿に押し付けて、来客達を氣げ怠だるげな瞳で見上げた。

「ようこそアヤカシ相談所へ。お前らの悩み、聞いてやるよ」

*

相談所を出た三人は、ビル街から住宅街へ歩いていった。

静乃とハルに手を引かれ、サトルは懸命に足を動かしている。

つい先ほどまで明るく会話を盛り上げてくれていたハルが、ビルから一歩外に出た瞬間スイッチが切れたようにぴたりと口を閉ざしてしまった。

決して空気が重いわけではないのだが、あれだけ賑にぎやかだった後にこうも沈黙の間が続くと、どうにもいたたまれなくなる。

沈黙に耐え切れなくなった静乃は必死に話題を探した。

「あ、あの……相談所は所長とハルさんのお二人でやつているんですか？」

聞いてから目をやると、ハルは鳩が豆鉄砲を食らったような表情で静乃を見た。

他愛ない世間話のつもりだったが、何か悪いことを聞いてしまったのだろうか、静乃の眉が不安と焦りでみるみる下がっていく。

「す、すみません、私余計なことを……」

「ううん、そういうことじゃなくて！ シズちゃんが話したいなら、アタシは全然いいんだけど……」

静乃の不安げな表情を見て、ハルは慌てて首を横に振って否定した。行き交う人々をちらりと横目で見ながら遠慮がちに口を開いた。

「えっとね、相談所は三人でやつてるよ。ついさつき出かけちゃったんだけど、後オオヤさんって人がいるの」

「オオヤさん？」

「見た目は熊みたいでちよつと怖いけど、強くて、大きくて、優しい……んーと、なんていえばいいかなあ」

「おとうさんみたいな人」

「そう、それだ！ オーヤさんはアタシ達のお父さんみたいな人。さすがサトルっち、あつたまいー」

サトルの一言で合点がいったようにハルは手を叩いた。そして助言をくれたサトルを褒めるように彼の頭を髪が乱れるほど撫で回す。

髪がぐちゃぐちゃになる、と抵抗しながらも、サトルは嬉しそうに笑っていた。先ほどのような賑やかな雰囲気に戻って、静乃はほっと胸を撫でおろした。

「そういえば、サトル君のお家ってどこなんですか」

「知らない」

「えっ」

住宅街まで歩いてきたところで飛び出したハルの暴露に驚いて、静乃は思わず足を止めた。なんの迷いもなく歩き続けていたからつきりハルが行き先を知っているものだとばかり思っていた。

「じゃあ私達も迷子ってこと……」

「あれ、シズちゃんなんか勘違いしてる？ アタシ達サトルっちの家に向かつてるわけじゃないよ」

「えっ、迷子のサトル君をお家に送りに行くんじゃない……」

「しずのお姉ちゃん、別にぼくは迷子じゃないよ」

「そうなの？」

静乃は迷子のサトルを家に送りにいくとばかり思っていたが、ハルはそうではないという。ハルとサトルは目的を理解しているようだが、静乃には何がなんだかさっぱり理解できていない。

「アタシ達はサトルっちを助けにいくんだよ。あ、でもどこに向かっているか分からないのはアタシも同じ」

「じゃあどっちみち迷子じゃないですか！」

「大丈夫だよ。ぼくがちゃんと案内するから心配しないで、お姉ちゃん」

声を上げた静乃の手をサトルが握りしめた。

本来なら励ま励ますさなければならぬ立場だというのに、逆にサトルに励まされてしまっているサトルに、呆然とするばかりだった。

休日の昼下がりということもあって、通りがかった公園は沢山の子供達で賑わって

いた。

子供達の笑い声、楽しそうに走り回る足音。先ほどまで廃れた不気味なビルの中にいたせいかな、人が生きている気配というものをひしひしと感じて静乃はなぜだかほっと息をついた。その時静乃達の横をパトカーがゆつくりと通り過ぎていった。

「今日はパトカーよく見かけるね」

「最近子供がたくさん行方不明になっているらしいから、パトロールしてるんじゃないですか」

ハルが通り過ぎていくパトカーを目で追っていると途端にサトルの顔から笑みが消え、緊いでいる手に力が込められた。

近頃この近隣で子供が行方不明事件が立て続けに起きており、連日ニュース報道が繰り返されていた。そのためか公園には子供に付き添う親が何人も見えた。

しかし親同士世間話に花を咲かせたり、スマートフォンから一切目を離さない親もいたり、子供の行動に目を光らせている親は少数のように見えた。

『自分の子供が誘拐されるわけがない』

行方不明事件なんて非日常なことが自分達に降りかかってくるはずはない。うちは大丈夫。平和な国だから親も子供も危機感が薄いのだろう。

「サトルっち？」

公園の横を通り過ぎようとした時、サトルはぴたりと足を止め、複雑そうな瞳で公園の中に視線を送っていた。

その表情に気づいたハルは足を止め、心配そうにサトルの顔を覗き込んだ。

「ちょっとだけ公園で遊んでいいんかい？」

公園内からは子供達の楽しそうな笑い声が聞こえてくる。サトルもあの子供と年がそう変わらない、きっと一緒に遊びたいのだろう、と静乃は思った。

「ううん、大丈夫。遊びたいけど皆が待ってる。それに今のほくがあそこで遊んだらみんなにメーワクかけちゃうし……」

行こう、と先を急ぐようにサトルは静乃達の手を引いた。遊びたいという気持ちを懸命に押し殺し、なるべく公園の中を見ないよう、必死に二人の腕を引っ張る。

そんな健気な彼の行動を見て静乃達は顔を見合わせ、ほぼ同時に頷いた。

ハルはサトルの手を放し彼の前に立つと、視線を合わせるようにしゃがみ込んで頭の上に手を乗せた。

「サトルっち。お母さんの所に帰ったら、暫く公園では遊べなくなるんだよ。少しくらいは大丈夫だから、今のうちに遊んでおいで」

「でも……」

「サトルっちはここまで一人で頑張ったもん。それくらいしても皆怒んないよ！」

ハルは嬉しそうに笑いながら、サトルの手を引いて公園に向かって駆け出した。乗り気ではなかったサトルだったが、終いには楽しそうに公園へと駆けていく。そんなサトルの顔を見て、静乃は笑顔で後を追った。

*

「お姉ちゃん、砂場でトンネル作ろう！」

三人は砂場で、誰かが忘れていったであろうおもちゃのスコップを拝借して大きな砂山を作り遊んでいた。

「そういえばさ、シズちゃんはリンちゃんの紹介でここに来たんだよね」

スコップで砂を積み上げながら、ハルが口を開いた。

「リンちゃん？」

「あ、えーっと、リンちゃんの苗字は……倉下さん、だっけ。ほら、あの白髪でイケメンの……」

シズちゃん、サトルっち、とすぐ人に渾名をつけて呼ぶハルは、あまり人の名前を覚えられないようだ。

うろ覚えで出てきた名を聞いて、静乃はすぐに頷いた。ハルのいう通り、芸能人の

ように整った容貌と目立つ髪色は、一度見たら簡単には忘れられないだろう。

「私、他の人より秀でた所なんてないし、できることなんて何もなくて。おまけに自分がやりたいことも分からずじまいで、採用試験を何社も落ちて困り果てた時に倉下さんが声かけてくれたんですよ」

「なんにもできないかあ……人によってはアタシ達みたいなのお話しできるだけで凄いついていわれると思うんだけど。というか、普通に接してくれるのがとっても嬉しいよ」

「私もハルさんみたいな可愛い子とお話できてとっても楽しいですよ」

静乃に褒められたハルは照れ臭そうにはにかんだ。

「やだなあ『ハルさん』なんて。一応、見た目はアタシの方が年下なんだし……ハルでいいよ」

確かにハルは静乃よりも年下に見えるが職歴上は先輩だ。さすがに呼び捨てはできないと、静乃は困ったように首を横に振った。

「え、で、でもハルさんの方が仕事上は先輩ですし……」

静乃が戸惑っていると、ハルがむず痒そうに体を掻きむしった。

「あー、もうぞわぞわするっ！ アタシのことは呼び捨てで、敬語もなし！ これセーパイ命令だから。破ったら罰ゲームで甘いもの奢ってもらうから、はいスター